

武藤元昭著『人情本の世界』（笠間書院）

江戸の女性が求めていた小説

橋口 侯之介

江戸時代の後期、女性読者をターゲットにした小説が人気を博した。人情本というジャンルである。男女の葛藤をテーマに、泣かせて、ドキドキさせて、ハッピーエンドで終わる「恋愛小説」が、江戸の女たちを虜にしたのだ。

一八二〇年代の文政期、それまでの遊郭を描いた洒落本が最盛期を過ぎ、かわって市井の男女を主人公とする初期型の人情本が別名「泣き本」といわれて登場した。しかし、まだ勸善懲悪の名残があつて女性の人気は今ひとつだった。それが次の天保期になって為永春水が書いた『春色梅児誉美』しゅんしよくうめこよみでブレイク。最盛期を迎えた。

本書はその春水の人情本を検証考察した著作である。それによると、春水が成功したのは、婦女子に徹底して「迎合」したサービス精神にあるという。さらに、読みやすい文体で艶情味があり、濡れ場も遠慮なく描く。従来の勸善色を薄めて愛の技術を描ききった。人情の「情」とは、男女の「情愛」である。「戯事を言われても顔を赤らめない」ほどに色事に興味を示した女たちの秘めやかな欲求を人情本が満たしたのである。本は安くないが、貸本なら銭湯代程度で読めた。売れ行きはその貸本屋のおかげで大変良かったのだ。女性読者というのは「批評」こそしないがおもしろくなければ「買わない」「借りない」という行動をとるので、出版する側に対しても無言の圧力をかけていた。その読者にも、板元の要望にも応えられたのが春水だった。

とくに著者が強調するのは、これらの作品の底を流れる「あだ」の精神である。それは女性の性的な魅力を表現した言葉で、深川芸者の「しゃんとしたいき」などがそれをよく表しているのだという。これが当時の女性のあこがれていた世界だった。板元もそれを求めた。春水の巧みさはそこに徹底して「迎合」したことにあった。ただし、これは矜持を失った「出版ジャーナリズム」の墮落でもあったが。

人気を維持するのは容易ではない。いつまでも同じ手が使えないので、ますます描写が露骨になる。それをお堅い老中・水野忠邦とその意を受けた町奉行がやり玉にあげる。結局、春水は天保の改革で頓挫してしまう。その後も別の作者が書いていくが、春水のように「あだ」を描ききれなかったのだろう。やがて、艶情味の少ない勸善懲悪型に戻ってしまうと、もはや人情本の人気は衰退してしまう。

このあたりの分析は、永年人情本研究を手がけてきた著者の真骨頂であろう。人情本というものがどういうものだったのか、どのような時代背景を負っていたのかが実によくわかる著作である。

同じ頃、フランスの『ボヴァリー夫人』には、貸本で当時流行の恋愛小説を読み、凡庸な夫への不満から不倫の恋に陥り、やがて駆け落ち、自殺に発展してしまう悲劇が描かれた。この夫人の目覚めは、まだ男性優位だった社会が生んだ「自我が芽生えると不幸が始まる」ことの象徴だともいわれた。そこに恋愛小説という媒介項があった。

翻って江戸の婦人方は、人情本をどう読んだのだろうか？ 自分の境遇と重ね合わせただろうか？ その後、あの興奮した読者はどこへ行けばよかったのだろうか？

まだ解明されなければならない課題が山積していると著者は述べている。評者としては次世代の研究者へ、ぜひこの女性読者たちの実態を今後究明してほしいと願うものである。人情本はそれほど多面的に興味あるジャンルなのである。